

## 緑の風

京都教育大学 環境教育実践センター 発行

第14号 2015年6月25日

環境教育実践センター長挨拶

環境教育実践センターに赴任して



管理棟2階から見た6月中旬のセンターフィールド南側

## 環境教育実践センター長挨拶

センター長 武田 一郎

平成4年に設立された環境教育実践センターの前身は栽培に関する教育・研究を目的とする旧附属農場であり、現在もその業務は変わっていません。センター長をお引き受けすることにはなりましたが、私は栽培の完全な素人です。ただ、この3月にご退職の梁川先生が特定職員としてお残りになり、新たにご着任された南山先生もまた経験豊かな栽培の専門家でいらっしゃいますので、私としてはまさに大船に乗っていることとなります。

さて、かつて1回のみでしたが、総合科学課程(昭和63年～平成17年)の環境学コース(平成9年～平成17年)で「環境学概論」という授業を担当したことがあります。前担当の先生が役職に就かれたために後任を指示されてしまったのです。それまでは「環境」の意味をまじめに考えたことはありませんでしたが、授業を担当するにあたって、まずは「環境」の意味を把握するために広辞苑にあたってみました。そうすると、「めぐり囲む区域」とか「四囲の外。周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼしあうものとして見た外界」と出てきました。つまり、「自分の周りの自分以外のすべて」という理解になると思います。この定義に従えば、一般には「環境」との関連では取り上げられることの少ない、法律や歴史、文学や語学、芸術、自然科学の対象となる諸現象まで、すべて

が「環境」になります。あまりにも漠然としているために、「環境学」という分野は存在するのであろうか、はたして「環境学概論」はどのような内容にすべきかと大いに悩みました。

しかも、環境学コースには自然環境・生活環境・地域環境の3専攻があり、「環境学概論」は3専攻の内容を包括することが要求されると考え込んでしまいました。しかたなく、私の専門の地理学をベースに、気候や地形や地質や植生などの自然環境と人間生活(衣食住)との関係、それらの積み重ねが歴史や文化や社会である、との筋書きで、なんとか半期の授業をこなしました。しかし、広辞苑の定義によれば、私が授業で対象とした現象や事物はほんの一部分に過ぎません。その後、コース会議で“「環境学概論」は私には難しすぎる”と主張し、それを何とか認めていただき、結局、この授業科目はその年で廃止になりました。私の「環境」に関する知識不足のために当時の学生の皆さんには大変なご迷惑をおかけしたと思います。

当時は日本の大学を取り巻く、それこそ「環境」の変化により、大学改革が始まった頃であり、「環境」の他にも「情報」や「国際」の語が付された学部や専攻の新設も目立っていました。学部や専攻を再構成する必要があったために、「環境」「情報」「国際」などが便利な“括り”として用いられた訳です。広辞苑に

は「情報」は「しらせ」とか「種々の媒体を介しての知識」、「国際」は「諸国家・諸国民に関すること」とあります。やはり漠然としており、「情報学」や「国際学」なども、「環境学」と同様ななかなか扱う範囲・対象を特定しにくい分野と言わざるを得ません。現在においても「環境(学)」「情報(学)」「国際(学)」などの語は良く使用されますが、「名」と「体」がしっかりしていない場合が多いのではないのでしょうか。

今回、環境教育実践センター長をお引き受けするにあたり、ふたたび「環境」の意味を考えました。やはり、「自分の周りの自分以外のすべて」を包括的かつ系統的に扱うことは難しいと思います。本学には「環境」に関する授業科目がいくつかありますが、それらはご担当の先生方の広範な知識と並々ならぬご努力で運営されているものと察します。とはいえ、環境教育実践センターの業務は何かと考えた場合、「自分の周りの自分以外のすべて」を対象とするためには予算もスタッフもまったく足りません。今年度は予算を大幅に削減されたこともあり、現実的には、従来のように栽培を中心とする教育・研究を滞りなく進めていくしかありません。もちろん、「自分の周りの自分以外のすべて」を対象とする「環境教育」にセンターを利用したいとの要請には、可能な限り対応させていただくべきであると考えております。

## 環境教育実践センターに赴任して

センター専任教授 南山 泰宏

4月に環境教育実践センターの専任教員として本学に赴任しました南山です。まず、自己紹介として、私がこれまでに携わってきた研究について、簡単に紹介をしたいと思います。私は大学では農学を専攻し、遺伝や種分化に興味を持っていたので育種学と雑草学のゼミに所属していました。大学院の頃には、水田のような湿地から空き地などの乾燥した場所にまで広範囲に生育する野生ヒエ（雑草ヒエ）の一種イヌビエを材料に、自生地との環境の違いと形態的、生理的形質における変異との関係性について、人間が攪乱する環境への適応性という観点で研究をしていました。

大学院を修了してからは、京都府の農業研究所で主に京のブランド野菜の品種改良に関する研究に長く従事していました。その頃の主な研究対象は京都府舞鶴市を中心に栽培されている万願寺トウガラシ、地元では「万願寺甘とう」と呼ばれ、果実の長さが15cm程にもなる大型で肉厚の大変美味しいトウガラシです。近頃はマスコミ等にも取り上げられ、全国的にも京のブランド野菜として有名になりましたが、数年前までは「万願寺甘とう」という名前とは裏腹に、シシトウガラシのように、時折、辛みの強い果実がなることがありました。そのため、それを知らずに購入した人から辛い果実が混ざっていると苦情が寄せられることもあり、私はこの万願寺トウガラシの品種改良を担当することになりました。

作物の品種改良には10年以上の年月がかかることが一般的ですが、この万願寺トウガラシの場合、辛みに関する特性だけを改良することは10年を費やしても難しいと、トウガラシの専門家には言われていました。しかし、その頃から植物分野でも徐々に研究が活発になり始めていた遺伝子診断の手法を用いれば、万願寺トウガラシの品種改良もうまくいくのではないかと考え、新しい分野の

研究にも着手しながら品種改良を開始しました。研究を始めた当初は辛い果実を判別するために、トウガラシ果実を毎日何百個もかじりながら品種改良を進めていましたが、精力的に取り組んでいた遺伝子診断手法の開発がうまくいき、それ以降は、種を播いて2週間程度の幼苗から抽出した遺伝子を調べれば、辛い果実がならない個体を判別することが可能になりました。



最終的に10年近くの研究期間を要しましたが、大学や農林水産省の研究者、さらには生産現場の技術者や生産者の協力を得て、それまで国内ではほとんど研究蓄積がなかったトウガラシ（ピーマンを含む）の遺伝子解析研究の発展に少し貢献するとともに、当初の目標であった、従来の万願寺トウガラシの美味しさはそのまま、辛い果実が全くならない新品種の育成に成功しました。現在は舞鶴市だけでなく福知山市や綾部市でも、この改良された万願寺トウガラシが広く栽培されています。このように、自分が育成した品種が生産者に受け入れられて、多くの消費者に食されることに、品種改良に携わる者として本当に嬉しく思います。

その後、私は和歌山大学教育学部で技術科の栽培分野を担当する教員となり、農業の面白さや大切さ、植物の不思議さなどについて授業の中で触れる一方で、将来教員になった際に地域社会との繋がり大切さを学んで欲しいと思い、和歌山県の特産である実エンドウやイチゴなどの県育成品種を農業研究所から分譲して頂き、実習の授業の中で栽培を

行ってきました。この度、京都に戻ってくることになり、京都教育大学でも京の伝統野菜などの栽培を通して食や農から地域との繋がりを、そして身近にある農業生態系から環境について考える機会を学生に提供したいと考えています。

最後になりましたが、5月に行った新入生の基礎セミナーで環境教育実践センターの紹介をしました。その際に行った受講生のアンケートの中に、久しぶりに土や植物に触れることができ懐かしい気持ちになりました、という感想がたくさんありました。京都市内も私が幼少期を過ごした頃と比べて都市化が進み、田んぼや畑が本当に少なくなりました。でも、京都教育大学にはこんなに近くに田畑があって、身近な自然を感じることができる場所があることを忘れずに、実習等の授業などで是非センターを利用して欲しいと思います。これからも、多くの学生や地域の方に作物生産の体験や環境について考える場として活用してもらえるように、頑張りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

### 編集後記

赴任してから早2ヶ月が過ぎました。作物の栽培は待たなして、慌ただしく毎日が過ぎて行きます。前任の梁川先生、センター長、スタッフの皆さんやその他多くの人に支えられて、何とかこれまで通りセンターの業務が回っているのかなと思います。でも、作物の栽培は1年周期なので、まだまだこれからといったところでしょうか。

ところで、表紙写真の左側にはスイートコーンが黄色い雄穂を出して大きく育っている様子が写っています。でも、右側のマンション横のスイートコーンは同じ頃に播きましたが、まだ小さくて雄穂が出ていないものもあります。日陰の影響が明らかに出ており、これからの作物の生育が心配されます。

(南山 泰宏)